

『 I serve 』と『 We serve 』について(No.06)

ライオンズ・クラブが奉仕活動を行う時は、『我々は奉仕する(We Serve)』又は『Not I serve, but We serve』を基本としています。すなわちクラブ全体でまとまって一つの事業に基金を拠出し、原則として個人個人では奉仕しません。

これ対し、ロータリークラブでは、組織的な奉仕活動も沢山ありますが、基本的には『会員一人一人が奉仕活動の単位』です。すなわち、『私は奉仕する(I serve)』、又は『 I serve, but not We serve』、つまり『自己の責任と判断において、職業奉仕など5大奉仕をしよう』という考え方が基本となっています。

ここで、ロータリークラブにおける組織的な奉仕活動の例を挙げれば、宇部ロータリークラブ(内良)奨学金や国際ロータリークラブの財団活動など数多くの奉仕活動が挙げられます。そこで、ロータリーは個人奉仕活動も団体奉仕活動も行う『何でもアリの奉仕クラブなのか?』と誤解され易いですが、決してそうではありません。ここで重要なのは『 I serve が原則又は基本 』と言

うことです。これらは一見して団体奉仕活動に見えますが、どの奉仕も、個人に対し**奉仕の機会を『提供』**し、『**奨励・勧誘**』しているにすぎません。この『**提供**』と『**奨励・勧誘**』がキーポイントです。

宇部に居ながらにして、世界的な奉仕活動、例えばビル・ゲイツ氏と共に全世界からのポリオ撲滅活動に参加できるなど多くの奉仕メニューが用意され、選択可能になっています。又、特定の集団奉仕活動に参加しても、画一的な奉仕を強要してはいません。その奉仕の仕方は、**質・量**ともに個人個人の選択に委ねられています。すべてに渡って個人の自発的な意思と責任を尊重し、多様性を重んじ、『**I serve を原則**』としています。

一方、『**国際ロータリー財団や米山記念奨学金に対し各ロータリークラブの一般会計から、或る意味強制的に一定の固定費が支払われているのは、団体奉仕つまり、『We serve』ではないか？**』との指摘があります。

この指摘に私は、以下の様に解釈・説明すべきと思っています。例えば、発展途上国にきれいな水をもたらし、平和活動に携わる人材を育成し、ポリオ撲滅活動など**世界的、大規模且つ持続**

的な奉仕の機会を開発・維持し、そして啓蒙活動を行うためには必要最小限の安定した資金が毎年必要となります。これらの資金が賄うため、分担金、俗に人頭税があります。決して奉仕活動の本体資金を徴収している訳ではありません。奨学金や財団活動の奉仕の本体費用はあくまで『 I serve 』による個人的且つ自発的な資金を集め賄われており、又そうあるべきだと私は考えています。

ノーベル文学賞作家である ジョゼフ・ラドヤード キップリング の作品『ジャングルブック』中の『狼の掟』に『 群れの力あってこそこの個々の狼の力、又個々の狼の力あってこそこの群れの力 』とあります。つまり『 宇部ロータリークラブの力あってこそこの個々のメンバーの力であり、そして個々のメンバーの力あってこそこの宇部ロータリークラブの力 』であります。これこそが、『 I serve 』の神髄であると思います。

ロータリークラブの奉仕活動は、強制的、義務的又は画一的な団体奉仕活動でなく、自発的かつ多様性が容認された個々の会員の身の丈に合った集合奉仕活動だと思います。

今一度、『 I serve 』とは何か、自分の身の丈に合った自発的な奉仕活動とは何かを考えて頂く良い機会となれば幸いです。
これで、会長の時間を終わります。